

---

# 定時制の夜に

猫缶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

定時制の夜に

### 【Nコード】

N3267E

### 【作者名】

猫缶

### 【あらすじ】

ちよつと特殊な高校生な僕たち。一話読みきりの短編集。

## 教授の過去

彼のあだ名は教授モウシイだった。

教授は学校をサボっては昼の街を彷徨さまよって

警察の職務質問から逃げる毎日を送っていた。

そんな教授はスポーツ推薦で有名私立に入学した。

頭も僕たちの間では飛び切り良かったから教授というあだ名だ。

といっても僕たちの偏差値なんて無いに等しかった。

それこそ医者に脳死判定されてもおかしくないぐらいに脳みそは機能が停止していた。

「羞恥心はにか」を「さはしん」と読んでいたぐらいだ。

これはそんな馬鹿でどうしようもない僕の友達の話。通称「教授」の話。

教授は陸上の選手で100メートルを凄い速さで駆け抜ける選手だった。

でも、一年生の夏の大会でアキレス腱を切ってから走れなくなった。

リハビリをすれば走れるようになったが昔のように走るのは無理だ

った。

それから教授は毎日に退屈していた。先生達の目。周囲の目。アキレス腱を切って走れなくなった教授は学校では用済みだった。

スポーツ推薦で入った私立。勉強は勿論ついて行けなかった。

邪魔者扱いされた。教師にゴミでも見るような目をされた。同級生の情けが白々しかった。

親は何も言わなかった。何も言ってくれなかった。

「罵倒ののししてくれたら殴る相手が出来たのに」

教授はちょっとだけ悔しそうにそう言った。

それから夏が終わって学校をサボるようになり家出をした。

公園で野宿のじやくをし、コインランドリーで一夜を明かす事もあった。

学校という管理かんり統制とうせいから外れた教授はコントロールを失った。

俺は何ができるんだろう？

走る以外に何ができるんだろう？

何がしたいんだろう？

今は何ができるんだ？

自問自答を繰り返した教授は冬の夜に一つの答えを出した。

これだけは思い出しても分からない。考えても分からない。

どうしてそんな答えに行き着いたのか。僕には分からなかった。

けれど、僕はその答えを責めたりなんかしなかった。

笑って聞いた。教授も笑っていた。

教授の答えは外されたのではなく外れる。

陳腐な日常と学校から外れる事を決めた。

準備するモノは学生証と学校から盗んだ消化器。

コレだけで外れる事が出来た。

消火器と学生証を持って教授は夜の交番を襲撃した。

消火器を警官にぶちまけて夜を疾走した。

深夜でも明かりの消えないコンビニで店員があくびをしている。

家の前で喧嘩をしていたカップルの呆けた顔

信号は青なのに何も走っていない道路。

後ろからパトカーのサイレン。

自分の呼吸<sup>こけい</sup>。

教授は走って、走って、走れない足で走った。

サイレンはまだ後ろの方。

まだ走れる。逃げ出すんだ。逃げるんだ。

走れなくなったら、歩いて、歩いて、歩き続けた。

それでも途中で立っていられなくなった。

口からは気付かないうちに涎<sup>よだれ</sup>とも唾<sup>つば</sup>とも分からない体の悲鳴<sup>こゑ</sup>。

教授は地面に倒れても手足をもがいて逃げた。

子供が歩くよりも遅いペース。映画に出てくるのろまなゾンビのよう  
うに。

結局、教授はそれから30分後に海までたどり着いて捕まってしまった。  
った。

「アキレス腱切った時の大会でおれ転んだんだ。一番前を走ってた  
のに。

その時、「立って！ 走って！」って声が聞こえたんだよ。でも足  
が痛かったんだ。

だけど、声の方を振り返ったら好きだった先輩だったんだ。

立ち上がって走ったよ。けど、だせえーよな。結局ビリだった。

『次頑張ろう』って言われたけど、次なんかなかった。

次一番になったら告白しようって思ってたのに。

だからかな。あの時、パトカーと勝負して一番を狙ったんだ」

教授はまた笑いながらそう言った。

「海がゴールだったの？」

尋ねる僕に教授は頷いて笑う。

「だから告白しようって思った」

警察に捕まった教授は事情聴取の時に「勉強の毎日で魔がさした」と嘘を付いた。

その時に学生証を出して身分を明かした。

何もかもうまくいった夜だった。走って、歩いて、もがいて、ぶち壊した。

管理統制から逃げ出す事が出来た瞬間だった。

次の日に教授は有名私立を退学させられた。

それは教授の計画通りだった。教授は大笑いをした。

今まで笑う事を忘れていた分、大声で笑った。それは朝刊に事件が掲載されていたからだ。

学校に教師に同級生に泥を塗ってやった。

「反抗期だったんだよ。ただ殴る相手が欲しかったんだ。格好悪いよな。」

だからフラれた」

ホットコーヒーがぬるかったのを何となく覚えてる。

教授の顔はどんな風になっていたのかは忘れた。

学校を辞めた教授はそれから新年度の四月。

僕たちより一つ年上だけど新入生として僕たちと一緒に入学式をした。

入学式の日、窓の外を見ると夜桜が散っていた。

時刻は午後六時。

定時制（夜間学校）の始業ベルが鳴っていた。

入学式から一ヶ月後。まだ夜は寒い春の日にコーヒーを奢ったお礼

に聞いた話。

## ある日、忘れ物を取りに

高校三年生の秋。

「教授、タバコ頂戴」

僕は作文用紙の束を前にして言った。

教授と呼ばれた藤田はマディソンバックから

煙草を一本取り出して僕の口に咥えさせてくれる。

ポケットから年季の入った古いジッポを

取り出すと渋い音が鳴りながら火がつく。

放課後の学校は静かで外は冷たい風が唸りを上げて窓ガラスを叩いていた。

「お前が学校で煙草吸うなんて珍しいな」

「別に吸いたくないよ」

「じゃあ、なんで？」

「噛み潰したいだけ」

僕はフィルター部分を噛み千切り、マルボ口を両切りにした。

そして口の中に入るタバコの葉を唾と一緒に教室の床に吐いた。

作文用紙の束にウンザリしていた僕。

世界史の授業のレポートを僕は五人分も書かなくてはいけない。

尚且つ一つずつテーマが違っていた。

最低二枚書かなくてはいけない。

単純計算で五人分で十枚。

勝手な事を書いて良いのなら数時間で終わるが、

教科書やプリント用紙を見ながら歴史を書かなくてはいけないのが、

非常に手間でウンザリしていた。

僕達の仲間内ではそれぞれ役割があり、

谷口は数学。中村は現代社会。白鳥は日本史。上村は英語。僕は歴史。

けれど教授だけは分担に負担せず自分でやっていた。

ベランダで両切りのマルボロを吸っている僕。

僕の書き終えたレポートを見ている教授。

学校には僕達しかおらず、満月が柔らかく弱々しい光で暗い道を照

らしていた。

月を見上げるとウサギが餅をついていた。

「教授、今日は月にウサギが見えるよ」

「見えねえーよ。どんなんだよ？」

「へっぴり腰で餅を突いてる」

「不味そうな餅だな」

「月の重力で練ってるからふわふわだよ」

「かもな……なんか腹減ったからコンビニ行かない？」

僕は頷いただけでしばらく煙草を吸っていると教室の電気が消えたところだ、

ようやくベランダを後にして教授の側まで走って追いついた。

コンビニのドアを開けながら教授が呟いた。

「深夜のコンビニの光って落ち着くよな」

「そうだね」

一周する形でコンビニの中を回り教授はアイスボックスの前で足を止めた。

「アイス食いたくない？」

「もう直ぐ冬だよ」

「冬になったら、次の夏まで食わないだろ？」

「そうかも」

「じゃあ、最後に食ってこつぜ」

レジにカップアイスを持って行くと、コンビニオーナー夫人がレジに立っていた。

「珍しいね。こんな時間に来るなんて」

オーナー夫人とは高校一年生の時からの知り合いで、

お腹を空かしていた僕達に良く賞味期限ギリギリの弁当をくれた。

「捨てるぐらいならタダであげた方が良いの」

そう言って。

「まだレポートが終わらなくて帰れなくて」

「このカップラーメンも持って行きな。奢りだよ」

オーナー夫人は袋と一緒に詰めてくれた。

コンビニを出ると霧雨が降っていて月は雲に隠れていた。

夜道を走って僕達は学校に戻ると着いた頃には、

コンビニのビニールの中に溜まった雨水でカップアイスが少しだけ溶けてしまっていて、

木のへらは手術用メスの様にアイスに刺さり、味気ない物となっていた。

「お湯沸かしてくる」

教授が出て行った後の教室で僕はまたレポートに取り掛かり残り一枚を残す所になった。

そうこうしている間にカップラーメンを二つ持って教室に戻ってきた教授。

「良いよ。ほら、あと一分だぞ」

差し出されたカップラーメンはそれは新発売で全然売れない為に直ぐに消えたラーメンだった。

「不味いな」

ラーメンを啜る教授。僕も無言で頷き食べる。

食べながら残り一枚のレポートを書き終えた。

「終わった」

「俺も」

「煙草吸うか？」

教授は頷く僕に煙草を投げて渡し、煙草を吸いながらベランダで自分の書いたレポートと

僕の書いたレポートを見比べる。

「俺のより良く出来てるじゃん」

「交換してあげても良いよ」

「どうして？」

「煙草のお礼」

「もっと自分の価値を大切にされた方が良いぞ」

「こんなレポートなんて煙草数本の価値しか無いよ」

「もっと高い空気を吸えよ」

「高いところの空気なんて薄くて不味いよ」

「だっせーから一度しか言わねえーからな。才能有るぞ。ひたすら書き続ける。」

頭だって良いんだ。勉強しろ。少なくともお前は学校で一番文才がある。

これはのぼせても良い事だ。自分の価値を安くするな。

お前ならレベルの高いところへ行けるよ」

お世辞を言われても僕は浮かれない。

中学生の時の自分を思い出してしまつて。

中学校一年生の九月。

空には一筋の雲、飛行機雲が走っていた。

遠くから聞えるトラックのクラクション。

空にはまだ太陽が高く、熱気が騒がしくて蝉時雨がどうにも悲しかった。

家に帰るとテレビには桜が狂い咲きをしていて、

子供達が噴水の広場で水浴びをしている映像が流れていた。

冷蔵庫から氷を取り出しすと僕は口に放り込み一口齧った。

シャリと音を立てて割れ、口の中でゆっくりと溶けて行く。

その後、二階の自室に行くと机の上に鞆を放り出して椅子に座る。

夏休みが開けたばかりで、休みボケをしていた僕は溜まっていた課

題を片付けようとしていた。

まだこの頃の僕は真面目に勉強していた。

劣等生の友人達も多かったが、彼らと仲良くしながら優等生との付き合いも忘れず、

テスト前にはこっそりと勉強をする様な奴で、服装もYシャツのボタンは全部締めていたし、

シャツをズボンの中に入れて、学ランの詰襟をしっかりと締めていた。

髪が短くて眼鏡をしていた僕は上履きをスリッパにする事は無く、

見た目も中身も真面目な生徒だった。

二次関数に頭を悩ませる事も無く、古文の文法も丸暗記をしていて、班長もやる程に出来た子供だった。

けれどあの日、鞆の中を広げるがプリントが見つからなかった。

椅子に凭れ掛りながら伸びをした後、学校に忘れたと思って僕は椅子から立ち上がった。

僕の家は中学校の直ぐ側にあり、往復で五分も掛からない。

その日は二者面談があって先生と生徒が今後の事を話し合う為に授業がカットされていて、

なるべく早めに終わらせたかった僕は最初の方にスケジュールをいれて貰って

早々に終わらせていた。

二者面談最終日だったあの日は六時まで教室が使われており、入れるかどうか解からなかった。

が、僕は時計を見て午後五時なのを確認して、

終わるまで学校で待っていていれば良いかと思いつながら学校へ向かった。

正門から出てくる生徒達は二者面談を終えたばかりで僕は適当に挨拶をして、

下駄箱で上履きに履き替えて二階の教室へ向かった。

廊下には数名の生徒が待機していてヒソヒソと話をしていた。

僕の教室の前にも一人の生徒がいて、女子の吉田さんだった。

「まだ終わってない？」

「江崎が長引いてる。あいつ不良だから」

僕の質問に答えると吉田さんは廊下の窓に向き直った。

廊下の窓からはプールが見えて水泳部が泳いでいた。

「涼しそうだね」

吉田さんはおでこにうつすらと汗をかいていた。

「そう言えばあんた達、この前プールで泳いでいて怒られてたよね」

「それは僕じゃなくて、僕と一緒にいた卓球部の奴ら」

「なーんだ、そっか」

卓球部はプールの隣の技術室と言うスペースを放課後になると練習場として使い、

そこはドリンクという卓球部の中で一番下手な連中が使うスペース。

一言で言えば劣等生の巣窟。

僕は放課後、良く遊びに行っては彼らと話をしていた。

あの頃の彼らは練習もせずに鬼ごっこをしたり、

「外周行って来ます」と言っ外に出てコンビニで買い食いをしてサボっていたり、

プールに無断で入って怒られたりしていた。

思い出に浸るほど、昔の事ではなかったのに思い出すと褪せているように思えた。

これが青春？ 鼻で笑った。あの頃、青春はもつと先にあると思っ  
てたから。

「それよりなんで来たの？ 私で最後だよ」

「忘れ物。プリント取りに来たんだよ」

「数学のプリント？」

「違う、社会の。ゴキブリがうるさいからさ」

「なんで堀越先生の事、みんなゴキブリって呼ぶの？」

中学生の頃に堀越先生と言う社会科の教師がいた。

顔の唇の近くにホクロがあって口臭がハツカとつソースと煙草の臭  
いがするから

生徒に嫌われていた。

最初にあだ名が「堀越」を略して「ホリホリ」だったが、

「ホイホイ」と「ホリホリ」がに似てる事から

「ゴキブリ」と言うストレートなあだ名で影口を叩かれていた。

そう説明すると吉田さんは「単純だね」と笑った。

あの笑いがある時には分からなかった。

幼いな、そんな含みを持たせた馬鹿にされた笑いだったと分かったのは随分後の事だ。

「夏休みどうだった？」

「いつも通りだよ。始まる前の方がドキドキしてる癖に何にも無い。宿題やって終わり」

「私、宿題やら無かった。それどころか勉強もしなかった。塾も辞めちゃった」

「なんで？」

「夏休み楽しかったよ、私は」

会話が噛み合っていない。話に乗るべきかどうか考えている間に吉田さんが続けた。

「私ね、夏休み彼氏が出来て、したの」

「したって？」

「エッチ」

水泳部がプールに飛び込んだ。水しぶきが上がる。

蝉時雨は止む事無く降り続けていて、僕はポケットからハンカチを出して汗を拭いた。

ハンカチをポケットに戻す時に下を向く。

吉田さんのスカートが短くなっていたのに気付いた。

夏が過ぎるってのはこう言う事なのかな、なんて事を思った。

いつも成長が早いのは女子。中学生になって男子は背の高さが追いついた頃には、

女子は別のステージを踏んでいる。

「それで何にもしなかったの？」

「うん、そう。浮かれて、それで終わり。膨らんで萎んでね。学期始めのテスト散々だったよ。」

馬鹿だよ、私。全部、水の泡にしちゃってさ」

吉田さんは下を向いて上履きのみつま先で壁をトントンと蹴っていた。

「夏休みが開けて、フラれたの。夏に盛り上がって、終わった途端に別れるなんて。」

本当に私って馬鹿みたい」

言葉が終わった時、教室のドアが開いて江崎が出てきた。

江崎はポケットに両手を突っ込んで、下を向きながら廊下を歩いて行ってしまった。

「じゃあ、ちょっと怒られてくるね」

吉田さんはそう言っただアに手を掛けて入って行った。

吉田さんの目から涙が溢れそうだったのを覚えている。

同じ夏を過ごしたのにこんなに彼女と僕の差はハッキリしてるのはどうしてなんだろう。

目に涙を溜める程の後悔なんてした事ない僕はそんな日が来るのだろうか。

そんな事を思いながら、僕は面談が終わった後の吉田さんに

会つのが気まづくて家路に着いた。

プリントは結局やらずに次の日、ゴキブリに怒られた。

その日から僕は詰襟を締めるのを辞めた。

Yシャツも全部ボタンを締めるのも辞めたし、シャツをズボンの中に入れるのも辞めた。

だから高いところへ行っただって彼女と同じステージには立てない。

勉強したって人は成長しない。

願った事は誰よりも優れる事ではなかった。

大人になりたかった。

吉田さんに掛ける言葉を探さずに逃げだしたあの日。

僕は子供だった。

上にも下にもあの時から興味が無くなった。

だから教授の言葉に僕はまた逆戻りをしているようで嫌悪した。

その感情こそが子供だったのに。

「僕は熱い風呂よりも、ぬるま湯が好きなんだ」

「何で？」

「だって、のぼせずに長く浸かっていられるだろ？」

「でも、一度ぐらいは熱い風呂に浸かってのぼせてみる」

「考えておくよ。それにしてもさっきのすっぱーだっせえー」

「だから一度しか言わねえーんだよ」

雨は止んでいて満月がまた雲の切れ間から姿を現し、

へっぴり腰で餅を突いているウサギが現れた。

「見えない？ へっぴり腰のウサギ」

教授は首を横に振った。

「多分、見れない奴はいつまでも見れないだろうな。それだけお前は十分特殊だよ。」

さて、そろそろ帰ろうぜ」

帰り際に僕は水が少し入ったコンビニのビニール袋を教授に渡した。

「何これ？」

「やらなかった昔？ 洗面器に水を張って、月を写してタッチするの。」

今日は特別にビニール袋に月を入れておいたよ」

教授は笑った。

「家に持って帰ってじっくり見るよ」

僕も笑った。

過去の苦しみが後になって楽しく思い出せるように人の心には仕掛けがしてある。

だから、僕はあれから少しだけ大人になったと思う。

大人のように笑った。

7月の初め。

気象庁はまだ梅雨明け宣言を出していなかった。

鬱陶<sup>うっとう</sup>しい雨と湿気で僕の長かった髪がぐしゃぐしゃになっていた。

高校三年生の時の事。あまりに雨が強すぎて僕はバス通学をした事があった。

ジーパンを履いて、シャツを着て、ポケットに携帯電話と財布。

携帯電話で時間を確認すると午後4時30分。

靴を履くと玄関を開ける。

外に出ると降り続ける雨が道路に川を作っていた。

僕は傘をさし、靴が濡れない様に川の無い所を歩きながらバス停まで歩いた。

あの日も学校があり僕は学校に行った。

いつまでも降り続ける雨を見ながらバス停でバスを待ち、田舎から街へ出るバスへ乗った。

バスには誰も乗っておらず、僕は一番後ろの席に座って窓の外の雨を見ていた。

駅に着くとそこから乗り換えて学校近くまで行き、後は徒歩で向かう。

学校に行く時も帰る時も誰もいない。いつも一人だった。

学校に着いた頃にはジーパンやシャツが濡れていて、

言葉通り水玉模様が出来て僕は顔を顰めた。

学食へ行き見知った顔を捜した。

谷口が前の席で食べていたので彼の隣に腰掛けた。

「濡れた？」

「濡れたよ。それにバイクのタンクに水が入って壊れた」

谷口は外で降る雨を一度見た後、苛立つたらしく食べかけのスープの中にスプーンを落とす。

「ごちそうさま」

言いながら立ち上がると食器を食堂のおばちゃんに渡した。

二人で学食を出て廊下に出ると廊下が濡れていた。

廊下の真ん中には「滑る、注意」と書かれた立て札が置かれていた。

歩く生徒達の革靴からキュキュと言う音が立っていて耳障りだった。

僕達はそのまま廊下を抜け階段へ。

「上で良いだろ？ 雨だし」

「そうだな」

三階の自分達の教室を通り越して四階へ上がる。

そのまま適当な教室を抜けてベランダへ。

屋根がある為に濡れておらず壁に隠れる様に地面に座ると

僕はラッキーストライクを取り出して火をつける。

谷口もポケットからセブンスターを取り出して口に啣える。

しばらく煙草を吸いながら雨で曇る風景を見ていた。

近くの巨大なビルが薄らばんやりと見える。

授業中、暇だったから何階建てか数えた事があったが何階建てだったかは忘れた。

遠くに教会。もっと遠くに山。聞こえる音は雨の音と遠くで聞こえるクラクション。

「今日は雨は止まないな」

沈黙を破ったのは僕だった。

「天気予報で言った？」

「臭いで解かる。この雨は止まない」

谷口は啜え煙草で鼻を立てて犬の様に臭いを嗅ぎだす。

「湿った臭いしかしねえ」

「風が冷たいだろ？ 大気が冷やされて夜にはもつと冷たくなる。だから強い雨が降るよ」

「そっか」

話半分に谷口は半分になった煙草を見つめて考えていた。

シケモクにして取っておくか、全部吸ってしまうか。そんなところだろう。

僕をチラッと見た後、谷口は半分になった煙草を口に啜えて煙を吐いた。

「明日は晴れるよ」

そう言っつて僕は目を閉じて煙を吐いた。

一本吸い終わると時間はまだ5分も残っていて僕は二本目の煙草に火をつけ、

谷口も二本目に火をつけた。

「今日で最後だよな？」

「ああ、最後だよ。足りてるから問題無いよ」

「じゃあ、帰ろう」

足りているか、足りてないか。僕たちにはとても重要な会話だった。

学校生活で一番大事な会話だっただろう。

それは出席日数。これさえあれば卒業が出来る。

この事実自体が日本の教育制度が危ぶまれると、

足りない頭で考えてみたが、僕たちにとってプラスなシステムなら活用するほか無い。

あの日はテスト前の最後の授業で僕達は必ず最後の授業を休む様にしていた。

前半は頑張り、後半がダレるタイプの僕達は出席日数を計算して

単位を落とさないギリギリまで休む。

だからあの日の「体育」の授業を休めば、全教科、全てギリギリまで休んだ事

になり楽をして単位を貰えた事になる。

体育は三時間目と四時間目。

一時間目と二時間目をを出席したら帰る予定をその場で組んだ。

僕と谷口は二本目の煙草を吸った後、教室に向かった。

外はもう日が落ちて暗くなっており夜に降る雨が不気味で

黒板でチョークを書きなぐる音と雨の音しかしない教室で授業を受けた。

二時間目は担任の数学。

僕は寝てしまい、起きると担任が僕の前に立っていてプリントを渡した。

進路希望の紙。

暫く見つめた後、それを受け取って鞆に詰め込み、

同じ様に寝ていた谷口を起こしてプリントを持たせて帰る支度をした。

他の生徒が体育館へ向かう中、僕と谷口は駐輪場で別れた。

谷口はバイクを走らせ、あっという間に雨で曇る風景の中、消えていった。

見送った後、僕はバスに乗る為に街中へ。

雨は予想以上に強くなっていて城のお堀はもうすぐ雨で溢れかえりそうだった。

ドブは雨で水が溢れ、道路を川にして海へ向かってどんどん流れていく。

僕は濡れた靴と靴下が気持ち悪くて足早に駅へと急いだ。

街の光と外灯。車の音と雨の音と人の歩く音。

全部が水を跳ねる音を立てながら街が一つの楽器を鳴らしているように、

僕はその事に気付いて笑ったのを覚えている。

駅に着いたのが八時二十分。

バスが来るまで十五分も時間があつた。

雨で濡れた体が冷たい風で冷やされ、

僕はココアを買って椅子に座ってバスが来るのを待っていた。

ココアを飲み終わるとポケットに手を入れ煙草を取り出す。

ジーパンが雨で濡れて煙草まで濡れて湿っていた。

何とか火をつけると、煙草の味が変わっていた。

二、三口吸って僕は煙草を捨て、濡れた煙草はゴミ箱へ捨てた。

時計を見ると五分しか経っていない。

近くの自販機で煙草を新しく買い直して火を付ける。

駅のホームには疎らだが人がいた。

辺りを見渡すと一人の女子高生と目が合った。

女子高生は大草さんだった。中学生時代の同級生。

僕に気付くと大草は立ち上がって手を挙げる。

「久しぶり」

挨拶もそこそこに僕の隣に座った。

確か高校はかなりの良い所に行った秀才。がり勉タイプ。

僕なんかと仲が言い訳も無く、当たり障りの無い会話がバスが来るまで続いた。

雨の中、やっと来たバスに乗り込もうと僕は立ち上がる。

けれど同じ地元の筈の大草さんが立ち上がらなかった。

「乗らないの？」

「私、家引越してあのバスじゃないの」

「あ、そうなんだ」

僕は暫くバスに乗り込む人達を見て、また椅子に腰掛ける。

「乗らないの？」

「あのバスは人が一杯だから」

だけどそのまま無言になってしまっ。

同い年でも同級生でも同窓生でも畑が違いすぎて会話がなかった。

当たり障りのない高校生らしい会話を探った結果出たモノがこの一言だった。

「今年で卒業だね。進路とか決まってる？」

半年以上の先の事を口にした。

そんな事を口にしたのは学校で渡された進路希望の紙を思い出したからだ。

「うん……私ね、専門学校に行くの。看護師の」

「看護師って勉強大変だろ？ 国家試験だよね？」

「大変みたいだけどやってみたいの。ここに行くのは一年生の時から決めてた」

大草さんは鞆の中から専門学校のパンフレットを出して僕に渡す。

パンフレットを受け取るがパラパラと捲って返す。

なんだかとても恥ずかしかったのを覚えている。

明確な未来を見ている彼女と自分の差を知ったようで。

「なんで看護師になりたいの？」

「ボランティアで内戦で傷ついた人とかを助けたい」

全くの甘ちゃんだなと思った。

そこで死んでいく人達がどうして死んでいくのか考えたことがない。

医者もいなければ看護婦もいないのは当たり前だが、

設備も物資も無い所で医者や看護婦がいても何も役に立たない。

日本で救える人を救えないのが現状。

ただ死んでいくのを見守る作業だと言う事を解かかっていない様子だった。

僕はその現実を聞いたことがあった。

ボランティアで海外に行っていた現役の看護師から。

だけどそんなこと教えられなかった。

努力は必ず実を結ぶ。けどそれが結果に繋がるとは限らない。

だからきつと夢は叶う、僕たちはそうやって嘘をつく。

これが良い嘘なのか、悪い嘘なのか分からない。

ただやさしくないのは確かだと思う。

ほんとうのやさしさは、全部教えてあげることだと思う。

そしてそれを受け止められるのが強さなんだと思う。

だから僕は優しくない。

「そつか。でもこっちで何年か経験を積んで行けよ」

「勿論」

大草さんは「当たり前」と言わんばかりに笑い、大草さんの乗るバスがやって来た。

「来たよ」

「うん、じゃあ」

立ち上がった彼女だけど、また椅子に座りなおした。

「やっぱやめる」

「人が一杯？」

「急いで帰る予定も無いし」

そう言うと大草さんは鞆の中を漁ると小物入れからリップクリームを取り出して唇に塗った。

僕は唇をなぞるリップクリームを見てちょっとウツトリした。

なんだか急に恥ずかしくなって、煙草に火をつけて気持ちを紛らわした。

何本もバスが来たけど僕と大草さんはそれらを見送った。

最終のバスは十時ちょっと過ぎ。

会話もなくなったところで彼女から話を切り出してきた。

「今日ね、実は誕生日」

「おめでとう。プレゼントは無いや」

「ううん、プレゼントとかは良いの」

「なんで?」

「そんなに仲良かくなかったから。話したいとは思っていたけど、話す機会無くてね。」

でも今日、話せたから良いの」

「そんなんで良いなら、いくらでも付き合っよ」

「ありがとう。プレゼントね、お母さんから今朝貰ったの。口紅」

大草さんは小物入れから口紅を取り出してキャップを外して見せてくれた。

薄いピンク色。

「塗らないの？」

「恥ずかしい」

「塗ってみれば」

「うん、そうだね」

「ちょっと待ってて」

大草さんはそう言い残すと駅のトイレに走って行った。

暫くして戻ってきた大草さんの唇は薄いピンク色。

安い蛍光灯の灯りの中うつすらと色が見えた。

「似合うかな？」

笑いながら聞く彼女が大人の様に笑った。

僕は「綺麗」と言うのが恥ずかしくて「まあまあ」と言ってしまう

た。

それから数分後に大草さんの乗るバスと僕の乗るバスが同時にやって来た。

僕も大草さんも立ち上がり、僕はバスに乗り込む大草さんの背中に「じゃあね」と声を掛けた。

大草さんも振り返って「じゃあね」と言って笑って手を振った。

手を振って行ってしまう大草さんが大人になるのを見て、

僕は進路希望の紙をぐちゃぐちゃに丸めて窓から放り投げた。

彼女の速度に焦っていたんだと思う。

同い年なのにあっという間に追い抜いていくそんな速度に。

あの笑顔が忘れられない。

あの夏から僕はどれだけ大人になったんだろう。

でもいつか追い付いたら、また話しましょう。

## 見知らぬ君と

全日制と定時制というシステムについて説明しようと思う。

出来ればおもしろおかしくジョークを交えたいと思うがきつと無理だと思う。

定時制は要するに夜間学校。夕方六時から夜九時まで勉強をする。

それを四年間。中学を卒業していれば誰でも入れる。

男でも女でもオカマでもホモでも性同一性障害でもなんでもあり。

それこそ超が付く優等生からヤクザまで何でも来い。

まあ優等生は普通の学校。つまり全日制に行くんだけどね。

そりゃあ、優等生が定時制になんか来るわけがない。

ましてや生徒会長がヤクザの学校なんてね。

これはヤクザっぽい顔をしているとかじゃなくて、

言葉通りヤクザだったんだ。

今これを読んでいる君たちの学校の生徒会長がどれだけ駄目人間でも、

ヤクザよりはマシだと思えば立派な学校さ。

部活の予算が運動部より文化部の方が多いだけで

「タマ取ってこい！」なんて言わないだろ？

生徒会会議に五分遅れただけで

「エンコしろ！」なんて言わないだろ？

ましてや生徒会経費に裏帳簿なんて無いだろ？

「コンクリート」「ドラム缶」なんて帳簿は。

でも先生に喧嘩を売る生徒がいる？ それでなくても刃向かう生徒がいる？

大丈夫、そんなの全然普通だよ。まだマシな方さ。

次の日、突然担任が盲腸で長期入院するよりはね。

全治三ヶ月だってさ。まあそんなわけで少しは分かってくれたかな？

これが僕のいた定時制という場所が。

毎日あんな所に通うのは暗澹あんたんたる気持ちだったよ。

でも、黄昏たそがれどき時は好きだったんだ。

光と闇が交わる時間。

全日制と定時制がほんの数分だけ交わる時間がね。

定時制の時間が始まる六時前に校内放送が行われていた。

「全日制生徒は速やかに校内に出て下校をするように」

こんなアナウンス。僕たち定時制が教室を使う為に

全日制の生徒は校内から出なくてはいけないんだ。

それでも残っている全日制の生徒はいるんだ。

丁度あの日もそうだった。

夏休みがあけたばかりの九月。

まだ夕暮れが遅く、授業が始まっても日が落ちる事は無く、

オレンジ色の夕暮れが校舎を照らして、教室にオレンジの光が注いでいた。

少しずつ時間が経つにつれ、その光は段々と引いて行く波の様に暗闇に消えていった。

そんなセンチメンタルも何処吹く風と僕はアルコールランプに火をつけて、

試験管に入れた粉末を熱して溶かし、

液体にして彷彿しないようにゆっくり揺らしながら温めていた。

僕は硫黄<sup>いおう</sup>を熱していた。黄色くて臭い、温泉の臭いという奴らしいらしいと言つのは僕は一度も温泉なんて入った事が無いから。

だから「これが温泉の臭いね」と思っていた。

それとは別にテレビや写真なんかで見る粉末の覚醒剤。

あれもこうやって熱して液体にした後、注射で注入するんだなと考えていた。

どうしてそんな事を思ったのかと言えば、

その頃先輩に「0.5gを5千円で買え」と脅されたから。

液体化した硫黄を彷彿しないように試験管を振りながら熱した後、

水をいれたビーカーを用意しておく。

その後、そのビーカーの中に熱して液体化した硫黄を入れる。

水の中で黄色い液体がゴムの様に伸びて固まっっていく。

アメ細工の様にゆっくりと底に沈殿<sup>ちんでん</sup>しながら、固まって硫黄が固体化する。

何の実験で何の意味があるのかはすっかり忘れたけど、

こうやって覚えていると言う事はきつとテストに出て、

僕はバツチリ正解を書いたのだろう。

なんだかんだと言いつきを付けてメンドクサがる僕だが化学の時間は好きだった。

化学が好きなんじゃない。化学の時間が好きなのだ。

化学の時間は実験が終わった後はいつも好きなことをやって良かった。

あの時、僕と金髪で見るからに馬鹿な谷口と一緒に

水と醗酵菌はいつじゆきんと砂糖を使って甘酒を作っていた。

糖の量を多くして、醗酵させればアルコール度数の高い甘酒が作れる。

そんなことを考えて。作り方は簡単。

水と醗酵菌と砂糖を混ぜて後は熱するだけ。

時々、掻き混ぜて終わりの作業。

その間に僕たちはコーヒーも作っていた。

アルコールランプと三脚を準備して、その上にはコーヒー専用のフラスコ。

お湯を入れて、インスタント豆を入れる。

後はしばらく待つだけ。あの時、

「ちょっとトイレ行って来る。煮詰めすぎるなよ」

谷口がそう言って席を立った。

「どうせインスタントだよ。クリープ入れたら、ただのホットミルク」

そう言って職員室から盗んできたクリープを見せて、

僕は彼のコーヒーに対する愛を放り投げて漫画に目を落とした。

少年ジャンプを読みながら、コーヒーが煮詰まっていくな音が聞こえる。

僕はアルコールランプにキャップを被せて火を消した。

谷口が帰ってくるのを待ったが五分経っても戻ってこない。

「長いな。糞か」と僕は独り言を呟いて湯気を立てて冷めていくコーヒーを見ながら

読み飽きたジャンプをゴミ箱に捨てた。

甘酒のビーカーをガラス棒で掻き回しながら時間をつぶす。

ビーカーとガラス棒がぶつかる音だけが静かに教室に響く。

コツコツコツ、トン、コツコツコツ、トントン。

違う音に気付いて振り返ると、制服を着た女の子が化学室のドアを叩いていた。

知らない女の子。

「すみません。忘れ物をしちゃって取りに着たんですけど、入って良いですか？」

「どうぞ」

全日制の生徒だった。ゴソゴソと机を探し回っていた。

「見つからないの？」

「え、あ、はい。おかしいな」

「何探してるの？」

「えーと、ジャンプ探してるんですよ」

「あー、それならさっきゴミ箱に捨てちゃったよ」

僕が読んでいたジャンプは机の下に置かれていた。

「あーありました」

ゴミ箱からさっと拾い上げて僕に見せる彼女。

「良かったね」

気の利いた言葉なんて必要ないだろう。

僕たちの出会いはこれで終わりなんだから。

クラスが違っただけで友達になれない人がいる。

ならシステムが違っなら友達になるところか

これ以上の会話を成立させるのは不可能だと思わない？

けど、あの時は違っただ。

「ところで何してるんですか？」

グラス棒を回している手を止めて僕は指を指す。

「こっちが甘酒。こっちがコーヒー」

「それをどうするんですか？」

「飲むんだよ。飲んでみる？ 温め直すけど」

僕はマッチを擦ってコーヒーのアルコールランプに火をつける。

火を付けて温めると直ぐに沸騰したコーヒーを紙コップに一杯注いであげた。

「良い匂いですね」

「インスタントだよ」

「違いますよ。コーヒーじゃなくてマッチです」

僕はマッチ箱を手にとってマジマジと見つめる。

普通のマッチだ。

「タイガーマッチ」

この名前とラベルの虎さえ無視すれば。

「どこが良い匂いなの？」

「奥底の匂いがしませんか？」

「意味が分からない」

僕は首を傾げながらコーヒーを一口飲み込んだ。

煮詰めすぎたから谷口が怒るなっと思った。

彼女はマッチ箱からマッチを一本取り出して火を付けた。

勢い良く燃えるマッチ。段々と火が弱まり、彼女がふつと柔らかく息を吹く。

得だよな、女って。そう言う仕草だけで色っぽい。

なんて思っているのと煙と同時に嫌な匂いがする。さっき散々嗅いだ硫黄の匂い。

彼女は天井に昇っていく煙を目で追う。蛍光灯に照らされて煙がハッキリと見える。

「良い匂いですよ」

彼女の言葉に僕も煙を目で追いかける。

「何処が良い匂いなの？」

「温泉って凄く深く掘るんですね。それで硫黄も出てくるんですよ」

「うん」

「地球の奥底の匂いがしませんか？」

「そう考えると面白いね」

「はい」

それから暫く無言のまま目で煙を追いながらコーヒーを飲んでいました。

「それじゃあ、ご馳走様でした」

丁寧に辞儀をされて、彼女はジャンプを持って教室からいなくなり、

入れ替わりに谷口が戻ってきた。

「今の誰？ 知り合い？」

思えば名前すら聞かなかった。

「知らない」

そうやって僕は沸騰させたままのコーヒーを紙コップに注いであげた。

煮詰めすぎたコーヒーはやっぱり苦かったようだ。

しかめっ面に殺意がこもっていた。

「苦すぎる。カプチーノにしろ」

「ないよ。そんなの」

「ならカフェオレ」

「あるのはオリゴ糖かクリープ」

薬品の茶色い瓶のラベルに「オリゴ糖」。

クリープには田村正和のシールが貼ってあった。

「注文のすくねえー店だ」

「本当だな。きっと宮沢賢治も草葉の陰で泣いてるよ」

「誰それ？」

「注文の多い料理店の話」

僕はコーヒーをこぼして甘酒は冷蔵庫にしまつ。

最後に片づけをして教室を出て行く時、

マッチ箱をポケットに入れておいた。

僕は一本だけ擦って火を付けると直ぐに火を消す。

君が誰かは分かりません。

君は僕が誰かは知らないでしょう。

でも僕は覚えています。

「地球の奥底の匂いがしませんか？」

この言葉と匂いと共に。

いつかまたコーヒーが飲める日を楽しみに。

## 暴力と正義

定時制高校2年生の12月の初め。

戻ってきた期末テストの結果は僕の貯金残高よりも酷い数字だった。

それでもなんとか平均点の半分以上を取った僕は満面の笑みで

友達に50点以下の答案用紙を見せていた。

勿論、友達とは谷口である。

僕と彼との間では学校生活の中で殆ど争いは起こらなかった。

体育の50メートル走も成績も彼女の有無も。

そう言った当たり前の青春と言うものに少なからず温度差が有ったのは間違いない。

それは僕と彼との間ではなく、僕たちと世間との間に生じた温度差。

どこかで僕たちは諦めていた。

定時制。ここにいることが

それ自体が全て負けていることを意味していたから。

自分たちの居場所やこれから行き着く場所。

不安や恐怖ではなく絶望を見ていた。

毎日笑って過ごせればそれで良かった筈だったのに、

中学生の頃には感じなかった漠然とした不安が、

「現実」を口に始める同級生を見ることで、

僕たちには重く押し掛かっていた。

そうした現実が本来行われるはずだった青春に対して

誰といても先が見えなかった僕たちは逃げているようだった。

ただ、僕達はテストの時期になるとテストの合計点で競い合っていた。

テストの合計点を計算しあい、負けた方が晩御飯をご馳走するのが決まりだった。

何故そうなったのかと言えば、テストと言う馬鹿馬鹿しいシステムを

少しでも馬鹿にする為にテストの合計点で競い合った。

なんでテストが馬鹿馬鹿しかったのか。それは教授の一言だった。

「なんで学校でテストをするか知ってるか？」

数字でしか人を計れない連中が世の中には沢山いるからだよ」「

教授はそんな事を言っていた。

テストの勝負はどっちが点数を多く取ったかではない。

僕たちが自慢出来る事といえば喧嘩で折れた右の前歯の事や遅刻と欠席の回数。

それに学校の成績がいかに悪いかと言うこと。

つまりは合計点で低い方が勝つ勝負。ただし追試になったら失格。

あの時、勝ったのは谷口だった。

僅差の勝負で数学では僕が大勝利を納めた。

が、世界史、化学、家庭科の三教科で山口が一桁の点数を叩き出した。

本来なら追試になる筈が呆れ返った教師が

追試は無しにしてしまった為に殆どルール違反で僕が負けた。

けど、晩御飯をご馳走すると言っても毎回ファーストフード。

谷口も僕にとびきり美味しくて豪華な物をご馳走してもらおうなんて思っていない。

彼だって解かっている筈だ。

僕の経済力を無視しようものならその場で彼を撲殺して逃げ出すだ

けだから。

ファーストフードで適当に注文し終えて、トレイにハンバーガーを乗せて席に着く。

そのファーストフードは2階建てで比較的学校が近辺にあり、

バイト帰りや学校帰りの生徒も多く利用する。

僕たちはトレイを持って2階の窓際に座って外の大通りを眺めていた。

時刻は午後7時を回っていた。

店内には僕たち以外に1人で座ってポテトをつまみながら読書している男性。

高校生カップル。それに大学生ぐらいの女の子。

僕達はただ話しながらハンバーガーを貪って、

外の大通りを見ながら冬休みの予定の話をしていた。

でも、すっかり寒くなった12月に僕は酷く感傷的でテストを終えた段階で無気力だった。

それは谷口も一緒だった。面白い事が有ればいいなあと言う具合で、自分たちから何かをする気にはなれないでいた。

食べ終わった後、タバコを吸い、携帯を弄ったりしながら閉店まで時間を潰す事にした。

どうせ家に帰ってもやる事が無いのは一緒だったし、一人も嫌だったから。

時刻は8時を回って店内に残っていたのは、読書をし続ける男と大学生ぐらいの女の子。

女の子はレポートらしき物を仕上げしており、参考書と睨めっこをしていた。

僕と谷口はタバコを吹かしながら窓の外の大通りに目をやって、

行き過ぎる人々に勝手に名前をつけて遊び始め、彼らの人生まで決める遊びに興じていた。

例えばくたびれたスーツを着てるサラリーマンは「これから家に帰って自殺」とか、

男連れの女は「二股を掛けていて三カ月後に男に刺される」とか

そんな幼稚以下の遊びだった。

「ねえ、遊ばない？」

その声が聞こえたのはそんな遊びを始めて数分後だった。

店内を見渡すと大学生ぐらいの女の子の横にストリート系の男が座

ってナンパをしていた。

彼女からシャーペンとレポートを取り上げ、

すばやく彼女の鞆に詰めて手を引っ張って外に連れ出そうとしていた。

僕と谷口は良くある風景と認識して我関せずを決め込んだ。

普段ならあんな奴、2秒でぶっ飛ばすがなんせ僕たちはテストを終えて無気力だった。

何よりも女の子が可愛くなかったと言うのが大きく、どうしても助ける気にはなれなかった。

だからまた僕たちは窓の外に目を移した時、「やめなよ」と声が出た。

さっきまで読書をしていた男がストリート系の男と

大学生ぐらいの女の子の間に割って入っていた。

ああ、なんて正義感のある男なのだろうか？

それとも馬鹿なのだろうか？

「んだよ。失せろ、眼鏡」

当時の僕の環境ではこの手の会話はよくある会話でさしも珍しくは無かった。

読書をしてた男とストリート男の会話を聞きながら僕は谷口に尋ねた。

「チンピラ代表の谷口、どうですか？ 読書男の台詞は？」

「最悪だな、5点。お前の答案用紙より低い点数だよ」

そう言われたが、お前に言われたくないと思った。

「その理由は？」

「確かに正論だけど相手にしてみれば解かってやってんだから『ばか』って言われたも同然。

俺だったら無言で止めに入った奴を砂にして埋めるけどな。

それで女の方もビビるだろ？ そう言った意味じゃ、ストリート系の兄ちゃんも紳士だな」

ムカついたら殴っても良いと言う考えが大多数を占める不良業界で紳士も糞も無い気がするが、彼に言わせれば紳士らしい。

しかし、読書の男は怯まずストリート系の男の腕を掴み、女の子の腕を引き剥がした。

「触んな」

「やめろよ」

案の定、すぐさまストリート系の男が手を出し、読書の男の方の眼鏡が床に転がった。

そのまま、蹴り上げられ「うっ」と言う呻き声が有線に混じって聞こえる。

ここは二階なので店員はいない。滅多に店員が二階に来ることは無いのだ。

しきりに女の子が僕たちの方を見てくる。

だから、しょうがないと思って僕は腰を上げた。

その時、谷口が僕に飲み掛けのコーヒーを渡した。

追加注文したての熱いコーヒー。ニヤニヤしながら僕に差し出し、

目には「解かってるだろ？」という意味が含まれていた。

言っておくが僕は平和主義なんて糞食らえだ。そんな事はあるかない。

絶えず争いがおき、弱い者が淘汰されていくのが自然だ。人間は生態系に入る。

地球と言う星が生きていると言うのなら、

その上で暮らす人間が生態系に入るかは入らないかなんて考えるのすら馬鹿らしい。

それに興奮してる男に「やめなよ」と言うのは、

読書の男の台詞以下の点数を叩き出してしまふ。

喧嘩をしてる最中に割って入る方法はさらに喧嘩を吹っかけて

暴力で解決するのが一番手っ取り早い。

紙コップに入った熱いコーヒーを持ち、僕は男に近寄る。

僕の接近に気づいたストリート系の男が「なんだよ？」と言った瞬間に

コーヒーを顔面に掛けてやった。

人は必ず顔を守る。そしてそれを手で押さえ、視界を遮ってしまう。

さらには熱いコーヒーだ。

そうそう痛みと熱さは引かない。別にコーヒーじゃなくても良い。

火の付いたタバコだってこのやり方は効果的だ。

ただ、僕の煙草はまだ半分ほど残っていた。

人生と同じで、途中で投げ出すわけには行かない。

声を上げて顔を手で押さえたら、後は空いた腹に蹴りを入れてやるだけ。

さらに転がった処で腹にも数発蹴りをぶち込む。

最後は髪の毛を掴んで、階段まで引つ張って行き転がす。それで終わり。

席に戻った僕に谷口が言う。

「さすがチンピラ！有無を言わさずの攻撃はさすがだね、

まさに鬼だよ。非道、外道、畜生だね」

散々言われた。拳句に「あそこまでは俺にも出来無いよ」と。

さっき「俺だったら無言で止めに入った奴を砂にして埋めるけどな」と言っていた癖にだ。

谷口にグダグダ言われていると女の子と読書をしていた男がやって来て、

お礼を言ってくれた。

「大した事じゃないよ」

そう言っつてサラッとかわす僕。

ニヤニヤしながら谷口が「今度はお前が誘えば？」と言った。

「そしたら今度はお前が止めに入るんだろ？」と冗談で返してやった。

そんな12月のある日。

まだまだ僕たちは自分の両手でなにが出来るのは知らなかった。

多くを求めすぎていたことに気付くのはずっと先だった。

## 殴る理由

定時制の生徒の交通手段はバスや電車で車からバイクに自転車と何を使ってもOK。

校則違反にはならず罰せられないのだが、

一介の貧乏高校生がそれら交通手段を使うのは学校から家までが遠いか、

もしくは自然災害による場合だけであって、

基本的に定時制のどの生徒も自転車と言うオーソドックスな交通手段を用いて登校する。 >br<>br<

これは僕だけでは無く、教授や白鳥に谷口、中村も上村も自転車で登校していた。

その中で上村は学校から駅二つ離れた所に住んでいた。

それにも関わらず上村は自転車通学をしていた。

誰もが「ハードな女」と言う印象を持つほどの長距離ランナー。

上村がどうしてわざわざこの定時制に来た理由は誰も知らない。

友達関係に問題があったという話もなく、何かの事件や問題を起こした話もない。

何かしらの過去があるのだろうと思っていたが、

あの時まで僕は人の過去を知りたいとは少しも思わなかった。

感情移入なんてしなくなかった。

誰かの為になんか泣いてやるかと思ってた。

高校一年生の時、僕は一人の先輩に目を付けられた。

生意気な下級生がいる、それだけで殺される場所がこの世にはある。

冗談みたいな話だが本当の事なんだから信じてもらうしかない。

勿論、そんな不文律が成立する常識は校則のどこにも載っていない。

けれどそれだけが正しい場所だからこそ成立する。

ナメられたら負け犬。メンチを切られたら殴り返すのが挨拶だ。

不良のルールはどこまでも不条理で言葉で語るには不可能な世界だ。

例えば陰湿なイジメがある。それでも理由はある。

気持ち悪いから、臭いから、馬鹿だから、ウザいから。貧乏だから。

生理的理由から社会的理由。理解できる範囲の言い訳がある。

けどあそこにはそういう理由が存在せずに暴力が行われていたこ

ともあった。

突然、上級生が血まみれで階段を転げ落ちてきたことがあった。

殴った奴は「なんとなく」とそれだけ言った。

悪はいつだってシンプルイズベストだ。

サーフィンしたいからベトコンの基地を焼く。

だからそれに比べたら僕の殺される理由はまだマシだったのかも  
れない。

先輩に目をつけられた理由は「挨拶をしなかった」と単純な理由だ  
った。

自分たちの価値観だけで生きている人間は特にこういったことに  
しかったりする。

僕だって挨拶は大事だ、とは思う。

けれどあの世界でのそういった関係を僕は否定していた。

関係を作れば必ず血を見る。僕自身、誰かを殴らなくてはいけない。

やがてそれが当たり前になる。そんな日常を手にしたとは思わな  
かった。

ましてややられたらやり返すのが常識。

終わらない復讐の連鎖はテロが無くならないのと同じ理由だ。

エスカレーターして行く暴力の先はどちらかが死ぬことでしか終わらない。

殴るか、殴られるか。考えるまでも無くどちらも嫌だ。

平和でなくても良い。けどその選択を迫られるのは嫌だった。

しかし残念なことに重要な選択ほど決断を速く迫られる。

それから数日後に僕は先輩と廊下ですれ違った。

「おい！」

そう呼び止められた。

「なんですか？」

「ちょっとついて来い」

「これから授業です」

そう言ってみたが相手は意に介さず目で物を言う。

ここに来て覚悟はしていた事だがこんなにもその機会が速くも訪れるとは予想していなかった。

トイレまで付き添う数メートルの廊下を死刑囚さながらの思いだった。

けど、その先輩は次の瞬間には僕の視界から消えていた。

気付いたらいつの間にか現れた谷口がぶん殴っていた。

暗闇の廊下で怒声が響いたかと思うと重く鈍い音が鳴る。

「なにすんだあ！てっ！」

谷口に向かってそう叫んだ先輩の声は途中で掻き消された。

谷口とは別にいつの間にか現れていた上村が腹に蹴りを入れていた。

その後、散々殴り飛ばし戦意をなくした先輩は置いて僕たちは駐輪場へと出た。

僕は聞きたいことがあった。

「どうして？」

なんで助けてくれた？

なんであそこにいた？

なんで殴った？

お前たちまで巻き込まれるぞ？

そういう疑問を含んだ「どうして？」だったのに谷口は「友達じゃん」の一言で片付けた。

その時、僕はあくびのふりして涙を流した。

僕がその時まで出会ったて来た友人の中で一人だっただろうか？

僕の為に自分の手を汚してくれる人が。僕の為に誰かを殴ってくれる人が。

僕はそう言うのが凄く苦手で嫌いだった。

いつかはきつと借りを返してくれる。

ウサギの耳のような温かい友情、淡い希望的観測、そんなどろどろの物には出来る事ならさわりたく無い。

無駄なものはキツパリと捨ててしまいたい。いつもドライで、そして身軽でいたい。

そう思っていたのに嬉しかった。

それから数日後に僕は別の先輩に呼び出された。

用件は喧嘩の事だったが、向こうは「争う気は無い」と言う。

どうして殴られたのに争う気がないかといえば、彼らは四年生で季節は夏。

夏が終わって冬が来れば卒業が決まる。

歳を取ると自然とリスクが増えるのは誰もが承知の事だろう。

それらリスクは社会的信用や自分個人の為の場合が多いが僕も人の事は言えない。

「それじゃ」

一通りの話し合いが終わ僕が席を離れようとする、先輩に最後に質問された。

「つーか、どうして関係ないあいつらがいきなり殴り掛かってきたんだ？」

「きつとむしゃくしゃしてたんでしょ」

「たまんねえー理由だな、おい！」

適当な理由で僕はその質問をやり過ごした。

口に出すのはなんだか照れくさかった。

教室に戻ると上村だけがいた。

「どうだった？」

「今後一切関わらない。こちらから手を出さない限り向こうも出さない。平和条約か、それともただの冷戦かはそっちの好きにしろって」

「ふーん」

「安心しろよ。僕の顔を見ろって」

「わざとらしく、嘘つきの顔だね」

「拳句に人を信じない顔だ」

殴るか、殴られるか。結局、その選択は今でも嫌だ。

それでも僕は殴ることを選ぶ。

「だけど今度は私たちの為にあんたがいつか殴ってくれるんでしょ？」

「もちろん」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3267e/>

---

定時制の夜に

2010年10月9日22時45分発行